

「わたしにとどまりなさい」

ヨハネの福音書 15 : 4 - 9

January.8.2023

ヨハネの福音書 15 : 4 - 9 (パワポ)

Preface

今朝も先週の新年礼拝に引き続き、今年の主題聖句について一緒に考えて行きたいと思います。

先週のメッセージをお聞きになれなかった方々は、めぐみ教会のホームページに入りますとお聞きになれますので、ぜひお聞きになって下さい。

せっかくですので、もう一度、壁に掛けられています 2023 年の主題聖句を一緒に声に出して読んでみましょう。

(オンラインの方々は、画面に出る御言葉を読んでください。)

**「あなたの名はもうヤコブではなく、イスラエルと呼ばれる。
あなたは、神と人と戦って勝ったからだ。
だから、わたしにとどまりなさい。」(パワポ)**

先週は、今読みました主題聖句の前半部分、創世記 32 : 28 の神とヤコブの格闘について考えていきました。

そして今朝は、後半部分「だから、わたしにとどまりなさい」というヨハネの福音書 15 章のイエス様がぶどうの木で、私たちがその枝であるという御言葉について考えて行きたいと思います。

Part One

イエス様は、「わたしにとどまりなさい」と仰いました。

「とどまる」という状態は、もう既にそこにいて、そこにいる状態を維持し、継続するという意味合いの言葉です。

つまり、イエス様の「わたしにとどまりなさい」という言葉は、「もう既にイエス様のところにいる」ということを前提にした言葉となります。

主イエス・キリストを信じ、告白し、洗礼を受け、信仰者として生きているだろう人々に語り掛けておられる言葉だということです。

このぶどうの木の例え話はその文脈から考えますと、一義的には、主イエス様をまだ知らない信じておられない方々に、イエス様を信じるのか信じないのかという信仰の決心を問う言葉ではなく、もう既に少なくとも一度は、「私はイエス様を信じます」と思い、告白している、自称でも他称でも、曲がりなりにもクリスチャンであるという方へのイエス様からの問い掛けの言葉になります。

もちろんだからと言って、まだイエス様のことを信じておられない方々には何の影響も及ぼすことの出来ない無益な言葉だということではありません。

「わたしにとどまりなさい」というイエス様の語り掛けに心が震え、イエス様を信じる者へと変えられることは大いにあり得ることですし、実際に歴史を通して、このイエス様の言葉が自分に対する語り掛けのように迫って来て、数多の人々が、主イエスを信じる者へと変えられて来たことでしょう。

ただ、元々ヨハネの福音書自体が、激しい迫害だったり、生活への思い煩いだったり、世を愛する心に誘われたりして信仰の破船に遭ってしまうような状況の中、主イエスにとどまり続けることの重みや真実性や恵みを、信仰者たちに今一度新たに知ってもらうことを目的に書かれたものだということからも、「わたしにとどまりなさい」というイエス様の言葉は、一義的に、「イエスを信じる」と告白したはずの人々への語り掛けであると言えます。

では、なぜイエス様は、イエス様を信じていると言う人たちに、ある意味当たり前のことのように思える「わたしにとどまりなさい」という言葉をおかけにならなければならなかったのか？

それは単純に、主イエスにとどまり続けることは、そんなに簡単なことではないからです。

「わたしにとどまりなさい」というイエス様の言葉の奥には、「わたしにとどまり続けることは、そんなに容易なことではありませんよ」という憂いの気持ちが見え隠れしています。

水が上から下に放っておいても自然に流れていくように、主イエスにとどまり続けることも、放っておいても自然にそうなるならば、敢えてこんな言葉を口にされる必要はなかったことでしょう。

でも、イエス様は、敢えてこの言葉を口にされました。

だからと言って、イエス様の「わたしにとどまりなさい」という問い掛けの言葉は、無理強いや強制ではありません。

無理強いしてでも、または強制してでもそうあらなければならないぐらいに大切に深刻なことではありますが、決して強制ではありません。

あくまでも語り掛けであり、語り掛けられた者たちの意志による決心が求められる言葉です。

自分の意志で「そうする」という決心の元、選び取って行く決断を期待して下さっている語り掛けです。

強制ではなく、互いに心が通い合う意思疎通と相互理解の下成り立つ、信頼関係を期待しての語り掛けですね。

なので、イエス様は、「わたしにとどまりなさい」と語り掛けた後、「私もあなたがたの中にとどまります」と、ご自身の私たちへの意思表示をして下さいまし

た。

イエス様のこの語り掛けと意志表示は、愛の関係には、互いの意思表示が必要不可欠だということも教えてくれています。

このようなイエス様と私たち罪人の間に交わされる言葉や気持ちのやり取りは、実のところ、あって当たり前のことではなく、どんなに頑張ったとて、決して乗り越えたり、飛び越えたりすることの出来ない大きな隔たりが打ち破られたからこそある恵みなんだということが分かります。

Part Two

イエス様に出会わせて頂く前の私たちには、イエス様の問い掛けに応えるのか、応えないのかなんていう選択の余地もへったくれもありませんでした。

先週、ローマ書3章と8章を通して見ましたように、人は皆誰一人例外なく罪人で、死に対して敗北者であり、世々限りない滅びへと引き寄せられていく罪の奴隷でした。

奴隷には、意志による決定権や選択権なんかありません。

嫌でもやらなければならないのが奴隷です。

つまり、罪の奴隷とは、したくなくてもやらずにはいられない身分と地位の悪循環の中に生きざるを得なかった者だということです。

イエス様の仰る実を結ぶことを期待するどころか、その実が何なのかさえも知らずに、神に繋がっていないことゆえに、投げ捨てられた枝が集められて、火に投げ込まれ燃えてしまうような者が私たちでした。

ところが、私たちへの愛に富みたもう神様からの熱心な働きかけとご計画の遂行によって、時に適い主イエスを知れる者となり、新たに神に繋がる者とされ、イエス様の仰る実を実らせることの出来る命へと変えられました。

即ち、主イエスにとどまり続けることの出来る意思表示とその選択を選び取っていくことの出来る神の子という地位と身分へと変えられたわけです。

以前の私たちには、選択もへったくれもありませんでした。

自分の力では、どんなに選び取って行きたくても、選び取ることさえも知らない、選び取れる立場にさえありませんでした。

しかし今や、私たちは、神様から授かった高貴な自由意志をもって、正に自由に、神に付く、キリストに繋がるといふ選択を、決心を、決意を下すことの出来る栄光の立場へと変えられました。

Part Two

なのに、なのにです。

「わたしにとどまりなさい」というイエス様の憂いの言葉が発せられてしまっています。

つまりは、その選択できる特権を放棄しているのか、または、間違っただけの選択をしてしまっているかのような状況があるというわけです。

私たちの周りを見ても、昔は一緒に教会生活をしていたのに今はいないという方が、一人二人は、何かしらのかたちでもおられることでしょう。

私が大学生の頃とても仲の良かったクリスチャンではない友人がいたのですが、彼を大学の聖書研究会にも誘い、めぐみ教会の礼拝にも誘い、まだ洗礼を受けてもいないのに、間違えて聖餐式のパンとぶどう酒を食べてしまったりというようなことがありましたが、結局彼は、めぐみ教会ではありませんでしたが、つくばにある他の教会で洗礼を受けました。

でもそれから、教会に繋がり、イエス様にとどまり続けるということはありませんでした。

今も彼は、イエス様には繋がっていません。

他にも、昔あんなに一緒に楽しく教会生活を、礼拝生活を共にしたのに、今はいないという方が、少なくない数おられます。

(彼らのことを思い出す度に祈らずにはられません。)

また、私がフラー神学校で学ばせて頂いていた時、現状に危機感を抱いた神学校が主体となって卒業生の動向を調査したことがありました。

フラー神学校を1995年以降に卒業した人たちが、現在どのような生活をしているのかの実態調査だったのですが、卒業生たちの半数近くが、今牧師や宣教師をやっていないということではなく、教会生活どころか、クリスチャンであることを辞めてしまっているということでした。(本来クリスチャンには、辞めるも辞めないもないことですが・・・)

神学を学び、イエス・キリストを、聖書の御言葉を宣べ伝えるために生きようと決心して入ったはずの神学校を卒業して、牧師どころか、クリスチャンであることを辞めてしまっている人が、とんでもなく多かったというこの事実が学校全体がショックを受けて、カリキュラムの改変に着手したほどでした。

イエス様の「わたしにとどまりなさい」というこの言葉の深刻性が、現実味を帯びて迫って来ます。

そして、何もこういうことは、今に至っての話ではなく、イエス様の時代からあり続けてきました。

Part Three

以前も一度見たことがあります。ヨハネの福音書6：66の記録は、「わたしにとどまりなさい」というイエス様の言葉が、時代を超えて教会に語り続けておられる憂いの言葉なんだということを端的に表しています。

ヨハネの福音書6：66 (パワポ)

ここに出てきます「弟子たちのうちの多くの者」とは、一人二人の話ではありません。

1000人、2000人とかという単位の数です。

このヨハネの福音書6章は、衝撃的なイエス様の奇跡のわざから話が始まります。

イエス様に従う男性だけで5000人、女性や子どもたちも含めると1万人近くはいただろうと思われる大勢の群衆が、イエス様の言葉を聞きに、また、悪霊を追い出し、病を癒したりというイエス様の不思議なわざを見るためについて来ました。

ところが、夜も更け、人里離れたところで、寝るところも食べる物もなくお腹を空かせている人々を見て不憫に思い、一人の少年が差し出した5つのパンと2匹の魚を用いて、1万人の人々が満腹になる程に食べさせるという奇跡のわざを起こされました。

余ったパン切れを集めると12のかごいっぱいになる程でした。

当然そこにいた大群衆みなびっくり、感極まって「彼らはこんなことを思いました。

「ああ、この方について行けば、こんな時代でも喰いっぱぐれることはない。もしかしたら、働かなくても、一生この方について行けば、食べ物に困ることはないかもしれない！」

そうして、イエス様を王に祭り上げようとしたところ、イエス様はそんな彼らの肉の思いを当然のように見抜かれて、その場を離れなさいました。

その後、湖の上を歩かれるというイエス様にしてみれば何てことないことでしょうが、私たちにしてみれば、これまたとんでもない奇跡としか思えないことをなさり、ご自身が天地万物をお造りになった創造者であられることを表わしなさいましたが、弟子たちはこのことも案の定、「ああ、やっぱりこの方はとてつもなく凄い方で、この方について行けば、権力も富も名誉も人々からも注目も賞賛も関心も集めることが出来るようになる！」と、歓喜しました。

ところが、イエス様が1万人近くの人々にパンを食べさせたその真意をお語りになりますと、弟子たちはいぶかしげになりました。

イエス様は、ご自身天から下ってきた生けるいのちのパンであり、イエス様の罪のために十字架で裂かれる御体とその血潮を食さなければ、どんなにこの世でパンを腹いっぱい食べたところで、行き着くところ永遠の滅びに至ってしまい、世の終わりの日には、永遠のいのちをもってよみがえりに与ることは出来ないということをお話されました。

すると、多くの弟子たちが、「なに訳の分からないことを言っているのだ！」

私たちが欲しいのは、この世での生きる糧であり、この肉体の病の癒しであり、この世での栄えであり、この世での安楽だ！ そんな人肉を食うことの勧めのような訳の分からない宗教染みた妄想に付き合っている暇はない！」と、遂に6：66にあるように、弟子たちのうちの多くの者たちが離れ去って行きました。イエス様がそんな彼らの思いを見抜き、お話しになった言葉を見てみましょう。

ヨハネの福音書6：26－29（パワポ）

主イエス様を信じるのではなく、イエス様を信じている風で、実のところパンを信じている者たちへのイエス様の語り掛けなされた言葉です。

Part Four

「耳のある者は聞きなさい。耳のある者は聞きなさい。耳のある者は聞きなさい」というイエス様の言葉が、心に響いてきます。

私たちは果たして、主イエス様の「わたしにとどまりなさい。そして、わたしの期待する実を結びなさい。そのために、わたしの愛にとどまりなさい」というイエス様の語り掛けの言葉が聞こえているのでしょうか？

私が最近読んでいる本で、カイル・アイドルマンというアメリカの牧師が書いた「Not a Fan」（ファンではない）という本があります。

この本は、「イエス・キリストを信じているとは言うものの、それはファンとしてですか？ それとも弟子としてですか？」という問いかけから始まります。

まだ日本語に訳されていないのが残念でならない本なのですが、その本の中でファンとは何なのかということについて、こう言っています。

「ファンについての基本的な辞書の定義は、『誰かを、何かを熱狂的に好きになっている人』である。

ファンは、体中にペイントをして競技場に行く人だ。

ファンは、観覧席でチームを熱烈に応援する人だ。

ファンは、選手がサインしてくれたTシャツを壁に掛け、車の後ろに応援しているチームの色んなステッカーを貼っている。

しかし、いざ、競技には参加しないし、出来ない。

競技場で滝のような汗を流しながら走ったり、球を蹴ったりはしない。

選手たちについては知らないことがなく、競技成績についてもすべて把握しているが、選手たちとプライベートな関係を持ち合わせてはいない。

大声を挙げ応援はするけれども、競技のために犠牲を払うことはしない。

おまけに、応援しているチームが負け続けると、あんなにも好きだった気持ちが少しづつ冷めていき、遂には、他のチームに鞍替えする事さえもある。

ファンは、どこまでもファンでしかない。」

そして、「イエス・キリストを信じているとは言うものの、それはファンとしてですか？ それとも弟子としてですか？」と問い掛けてきます。

「ファンとしてならばイエスについて行ってもいいけれども、弟子としては御免被りたい！」というのが、ヨハネの福音書6：66のイエス様の元を離れて行った人々でした。

Part Five

先週は、神と格闘したヤコブについて見ていきましたが、彼が一生を通して、形はどうであれ、またどんなに無様だったとしても守り通した、私たちが彼に見倣わなければならない大切なことが一つあります。

それは、「神のうちに、主イエスのうちにとどまり続けた」ということです。

ヤコブという名前がこの時ばかりは大いに生きてきます。

ヤコブという名前の意味の通り、神のうちにあることを掴み続け、そのやり方は決して褒められたものではなく、むしろ間違っただけではありましたが、神の祝福の通路に成るべく、兄エサウが軽視した長子の権利に神の祝福と約束を見出し、奪い去ってでも、それを手に入れようと努めました。

やり方は無様で卑怯で、家族を傷つけてしまう部分もありましたが、ある意味、それでも神のうちにとどまろうとする執念の様なものは、物凄いものがありました。

創世記32章のヤコブの渡しでの神との格闘においても、全くもって焦点・視点はズレていましたが、それでも神様に繋がり続けようと掴み続け、「私の願う幸いを下さるまでは放しません」と、ここでも神にとどまり続けることを辞めませんでした。

そして、神にとどまり続けた結果、実を結びます。

兄エサウとの和解というありとあらゆる人の営みの中で最も美しく、最も価値があり、最も神様が望んでおられる実である和解という実を結ぶに至りました。

ヨハネの福音書15章でイエス様が仰っているぶどうの木になる実は、直接的には、ガラテヤ書5章の御霊の実です。

ガラテヤ人への手紙5：22（パウロ）

愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制という御霊の実は、御霊の実というぐらいですから、私たちから出てくるものではありません。

そして、そのすべてが、私たちが誰とも関係を持たず、一人で勝手に実らせることの出来るものではありません。

御霊の実の内容そのすべてが、誰かとの関係性の中で結ばれる実です。
愛も、寛容も、親切も、自制も、すべて相手がいて初めて成り立つものです。

私の正しさ、私の無念さ、私の悔しさ、私の憤り、私の考え、私のものを主張し続けることに結ばれる実ではありません。

私の罪深さ、私の高慢さ、私の浅はかさ、私の身勝手さ、私の残忍さ、私の偽善さ、私のサタン性、私のいい子ぶるずる賢さ等々に初めて気付かされ、跪き、御言葉に打たれるというイエス・キリストにとどまることによるのみ、初めて実らせて頂く実です。

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分を否定し、自分の十字架を負って、わたしに従ってきなさい」というイエス様の言葉が、耳の奥でジンジン響いてくるようなことが、主イエス様にとどまるということです。

Conclusion

私は、私なりに一生懸命に、無我夢中で、相手のことを思って、良かれと思ってしたことが理解してもらえず、逆に傷つけられたがっかりしたというようなことを聞きますと、はらわた煮え繰り返るような思いになるとともに、体中の力が抜けて、胸の真ん中が締め付けられて痛くて寝込んでしまうことがあります。

そして、「なんて分からず屋なんだ！　なんてひね曲がっているんだ！　なんて意地悪なんだ！　何とかして、僕の正しさを証してやろう！」と思うのですが、そういう時に限って、神様は私に直ぐに弁明の機会を与えて下さろうとはなさいません。

その代わりに、イエス様にとどまり続けることをもって、私自身の間違い、私自身の高慢、私自身の浅はかさ、私自身の愛のなさ、私自身の無力さを受け止めるように仕向けなさいます。

そうして、寒さに耐え、水不足に耐え、風にさらされ、時には踏まれることをもって、それでも主イエスにとどまり続けることを選び取って行く信仰と実りを期待させるように仕向けなさいます。

結局のところ、誰かとの関係性が良くない、特にキリストにある兄弟姉妹だという人たちとの関係が芳しくないという時は、キリストのファンではあるけれども、キリストの弟子として生きることを無意識の内に拒んでいることであり、キリストにとどまり続けるという決心よりも、我に、私に、我にとどまろうとする頑固さが、私の内に巣食っているということになるでしょう。

またそれとは逆に、キリストにとどまり続けることを敢えて選び取って行くならば、私自身に問題があるということ認めざるを得なくなるでしょう。

キリストにとどまり続けるということは、簡単なことではありませんが、その先には、人の営みの中で最も美しく、最も価値があり、最も神様が望んでおられ

る実、御霊の実が約束されています。

だから、どうか、イエス・キリストにとどまり続けましょう。

イエス・キリストにとどまり続ける決断を下し続ける決心をしたいと思うのです。

お祈りいたします。

祝祷：わたしのとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。